

今月の谷口雅春先生のお言葉

立派な本を読めば立派な人になれるのです

父母に立派な本を選んでもらいなさい

どんな本が立派な本かは、お父さんや、お母さんや、先生が知っていられます。よい本は出来るだけたくさん買ってもらいなさい。本というものは、「心」が外の景色を見るための窓のようなものです。私が中学生の時分には、中学に図書室がありまして、昼の休憩時間に一しよけんめい読んだものです。それが今でもたいへん私の役に立っているのです。 「本のない部屋は窓のないようなものだ」といった人もあります。よい本がなら

んでいるのを見るだけでも、自分の心に楽しいよろこびをあたえるものです。よい本をしっかりと読まない人で、立派になった人はありません。ほかの玩具や、遊び道具を買ってもらっても、よい本をお父さま、お母さまに買ってもらうって、それをつねに読むように心がけなさい。

(新装新版『生活読本』137～138頁)

本を可愛がって読めば力がつく

勉強室は、すきな本をたくさんならべておいて、気がむいたとき、自然に、自分でよろこんで読むことにする方が、

力がつくのであります。いやいや人から「読め」といわれ
て、気がすすまぬのに読んだのでは、心の窓がしまつてい
て、本に書いてあることが充分頭へはいらぬのであります。
本を可愛^{かわい}がって、その本をひらくことが、楽しい気持ちにな
って「わたしの可愛い本よ」といって可愛^{かわい}がってから本を
読めば、本に書いてあることが、一層よく心の中にはいつ
て来るのであります。（新装新版『生活読本』140～141頁）

本を読むにもコツがあります

魚をとるには魚をとる方法があります。小さな魚を、
目のあらい網でとうろと思つても、とれるものではあり
ません。それと同じように本を読むには、本を読む方法
があります。読みかたが大切なのであります。

いたずらに本をたくさん読んだからといって、えらい
わけではありません。世の中に出て、立派な人になれる
か、なれないかということも、その大部分は、どのよう
にその人が本を読んで、自分を養ったかによって、さま

るのであります。

網やザルで水をすくうようにしたからとて、何一つ自
分のものになるわけではありません。トンネルの中を走
る汽車^{きしゃ}のように、盲^{めくら}めつぼう早く本の中を走り抜けたか
らとて、何一つ心の中に残らないようでは、なんにもな
らないでしょう。（中略）

これと同じような調子で、心が「うわの空」になつて
本を読んでいるのでは、それは人間の生命^{いのち}と時間との無
駄使いをやっているにすぎないのであります。本を読ん
でも、その著者は誰か、中味には何が書いてあつたか、
何をおしえるためにその本は書かれていたか——こんな
ことさえ気がつかないで本を読んだ気持ちになつている人
も随分^{ずいぶん}ありますが、それは実におろかな本の読みかたで
す。（新装新版『生活読本』143～144頁）

立派な人の伝記をお読みなさい

本に書いてあることは、ただお料理の材料みたいなも

のであります。その材料をどのように組みあわせておいしいお料理にし、それを自分の心の滋養物にするかどうかは、本を読む人自身にあるのであります。材料のよいところは捨ててしまつて、くずのところばかりを集めて料理を拵えてもおいしい事はありません。本を読んでも、くずのところばかりを「面白い、面白い」といつて読んで、ためになるところを捨ててしまつては読まぬほうがましな位です。

面白いばかりを目的に書いた本よりも、昔から立派な人になつたり、世の中のために尽した人々の伝記をお読みになることは、たいへんためになります。文章はコトバの力で、書いてある事と同じように、読む人をならせる力をもっているものです。つまらぬ本を読んでいますと、詰らぬ人になりますし、聖人の伝記を読んでいますと、聖人になりますし、英雄の伝記を読んでいますと英雄になるものです。

(新装新版『生活読本』145～146頁)

善い本は同じ本でもたびたび読みなさい

数をたくさん読むよりも、すこしの立派な本をよく味わいながら読むことは、その人の精神を立派なものにします。むやみに大食するよりも、適当な養分を適量にいただくほうが健康によいようなものであります。よい書物は一遍や二遍読んだだけで捨ててしまわないで、十回でも二十回でも、繰返し読むことです。本の表紙は大切にしてお包みでもして、一遍読み終ることに取りかえて、新しい気持を出すのがよろしい。

本の中味は、読んで感心したところに赤い線を一度引いておき、その次にまた感心したところには青い線を引いておくなど、たいへんよろしい。本にすじを引くのを遠慮することはいりません。読んだときの感想などを本の余白に書いて置くことはあとでたいへん参考になり、大人になつてからも、自分の少年少女時代にこんなところを、こう考えながら読んだのだな——と思ひ出すのも楽しいものです。

(新装新版『生活読本』146～147頁)